

学生の健康白書

近藤孝晴

国立大学法人保健管理施設協議会は、5年に一度、学部学生の健康状態の調査集計を行い、健康白書を作っています。5年毎に、基本調査と拡大調査を交互に行っており、第1回は1984年に行われ、引き続き、1990年、1995年、2000年、2005年に調査が行われています。調査項目は、基本調査では、健康診断の受診率、身長、体重、BMI、血圧、肺結核調査、拡大調査では、基本調査の項目に加え、健康診断の全項目、生活習慣、日常業務、精神・心理面の健康、休学・退学・除籍からみた健康状況です。健康白書の第1回は岡山大学の山吹隆寛名誉教授が委員長で、大変立派な白書を作成されました。コンピュータがない時代にあって、今の白書と変わらないデータを、よくもまとめられたものと、驚いています。第2回は戸田安士名古屋大学名誉教授、第3回は川崎晃一九州大学名誉教授、第4回は佐藤祐造名古屋大学名誉教授、第5回は私が委員長でお世話させていただきました。

2005年度から、試行的に大学院学生のデータを集計しました。そこで、ここでは、1984年からの健康白書データの推移と、大学院生のデータをお示しします。

まず、対象者数、受診者数、受診率の推移ですが、いずれも、増加しており、2005年の集計では、対象学生数約40万人、受診者数31万人に上っています。健康診断の受診率を学年別で見ますと、2年生が70%を切りますが、3年生から受診率は増加します。

男子学生の身長の平均値（図1）は22歳から24歳でピークになります。この年齢と身長の関係のグラフに高校生の身長を重ねると、きれいな成長曲線が見て取れます。一方、大学院生は身長の時代的な推移もあって、ピークより少し低い値となっています。1984年から平均身長の推移を見ますと（図2）、2000年あたりから17歳で、2005年から大学生で身長の増加が止まっているようです。

図1. 2005年年齢別身長平均値（男）

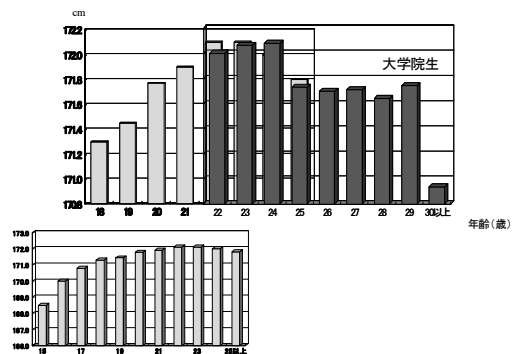
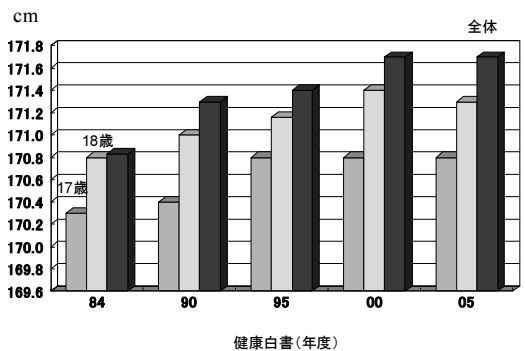


図2. 身長の推移(男・17、18歳、大学生全体)



女子学生の平均身長は学部学生まではほぼ男子学生と同じですが、身長のプラトーがやや高齢化

しております（図3）。身長が増加の傾向も男子学生と同様でした（図4）。

図3. 2005年年齢別身長の平均値（女）

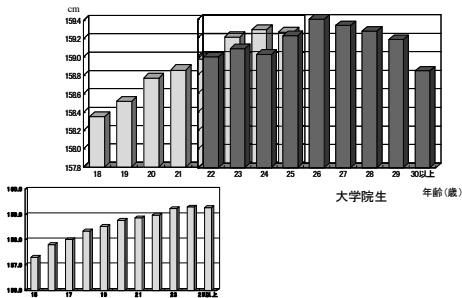
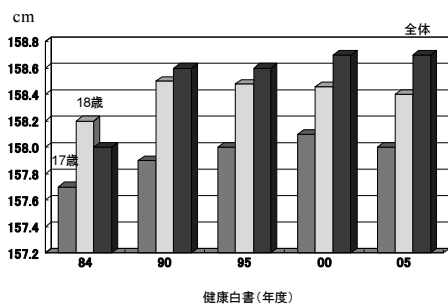


図4. 身長の推移（女・17,18歳、大学生全体）



一方、高校生から成長につれて増加してきた男子学生の体重は、19歳から21歳でプラトーに達しますが、ここから再び増加し始め、大学院生になっても増加し続けます（図5）。この体重の増加は、30歳でもBMIが24弱であり、肥満の範疇には入りませんが、この増加が続くと、35歳には25を超

図5. 2005年年齢別体重（男）

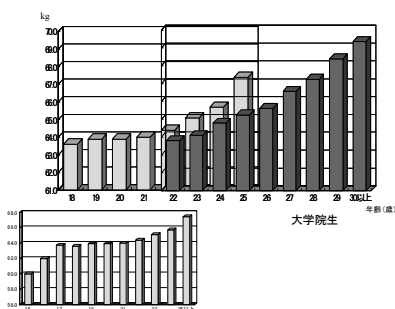
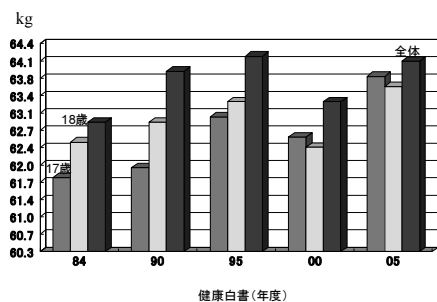


図6. 体重の推移（男・17,18歳、大学生全体）



えて肥満となり、40歳には28になると推測されます。また、平均体重は1984年から増加し続けています（図6）。2000年の体重が減少していますが、健康白書での体重調査の技術的の問題かと思っ

ていたが、高校生でも2000年には小さな谷が見られ、何らかの社会的要因が働いているものと考えられます。女子学生の場合は男子と異なり、17歳まで成長とともに増加してきた体重は、18歳で極端に低下し、19歳でやや戻りますが、再び低下傾向を示します。この18歳での体重低下は、1984年の調査当時から多少認められ、1990年からは顕著となっています（図7）。この体重は29歳以降、増加の傾向に転じます（図8）。平均体重は1984年から微増の傾向にあります（図9）。

図7. 年齢別体重（女）の推移

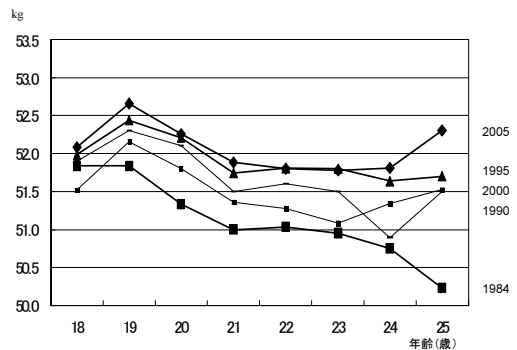


図8. 2005年年齢別体重（女）

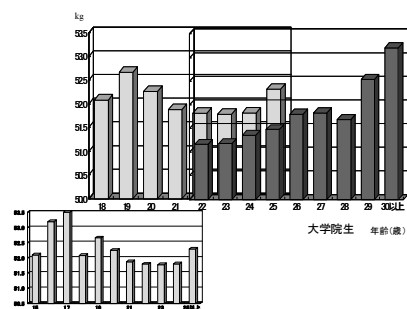
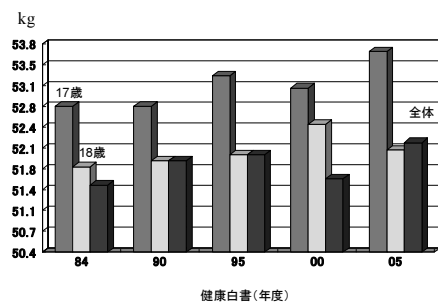


図9. 体重の推移（女・17,18歳、大学生全体）



以上のように、男子大学院生では、年齢による体重の増加が特徴的で、この傾向を大学院生のうちに止める必要があると考えられます。

中央教育審議会の委員が提案した2025年に向けた大学教育の転換と革新によると、2025年には、国境や年齢の壁を破って、多様な大学生となっているといいます。従って、将来の健康白書は、年齢や国籍など多様な学生を想定して企画する必要がある一方、得られたデータを各大学へフィードバックする努力も必要だと考えられます。このためには、長期的経過観察など、前向きの研究的要素を含んだ調査を行っていく必要も、今後、考慮すべきだと思われます。

来年度は、健康白書2010年の年です。大学院生を含めた全学生の調査を行いますので、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

トピックス 1

名大スポーツクラブ構想？

島岡 清

3月末までに、長年の懸案であった陸上競技場の全天候化が完成する予定です。また、フットサルで良く使われている多目的コートや軟式テニスコートの人工芝化も実現する予定であり、昨年度新築された複合棟と合わせて、山の上・総合グラウンド付近はかなり充実した運動施設となります。さらに、22年度には第一体育館の耐震改修も予定されています。まだ、武道場や大幸グラウンドの整備が遅れていますが、すでにある温水プールや夜間照明付きのテニスコートを含めると、名大の運動施設は体育系学部のある大学を除けば、国立大学の中では全国トップクラスの施設を持つ大学となります。したがって、次の課題は、これらの施設を今まで以上に有効に活用して、本学の活性化や社会貢献につながる方法を考えることだと思います。

安全性の高い人工芝フィールドは、すでにホー

ムカミングデイの際に子供向けのスポーツ教室（サッカー、ラグビー、野球等）に使われていますし、名古屋グランパスや名古屋市と協力した高齢者の健康運動教室でも使われました。また、今回オールウェザー化する陸上競技場のトラックを活用して、近隣の高校生の記録会を行ってはどうかという陸上競技部の意向もあります。名大の駅伝が、国立大ではナンバーワンであることは、陸上競技が好きな高校生は皆知っていると思いますから、記録会に参加することは励みになり、名大を目指すことにも繋がるのではないのでしょうか。また、柔道部では従来から高校生との合同練習や、高校生を含めた柔道愛好者や指導者を対象とした公開講座を行っています。責任体制のはっきりしている体育会運動部が、大学としての正式な公開講座を実施できるようにすることが今後必要になるでしょう。

OBとの交流を主目的として、数年前からホームカミングデイが始まりました。名大のOBは10万人を超えて、社会的にも大きな力を持っています。この方々と年に1回ホームカミングデイや出身母体のOB会で交流するだけというのは、少なすぎると思います。日頃からの連携を深める上で、スポーツや運動を通じた交流は極めて有力な手段です。また、中高年者の健康づくりにおいて、運動が最も重視される時代になっています。例えば、名大スポーツクラブ（仮称）といった、大学が支援する法人組織を作って、学生、職員、OBの方々が大学の運動施設を利用してスポーツを楽しんだり、健康づくりをできるようにすることが必要ではないのでしょうか。できれば特定保健指導やOBの方にも利用できる中高年向けのトレーニング施設があるとさらに良いと思います。そのためには施設の管理・運営体制を今よりはるかに充実する必要がありますが、名大関係者の福利厚生のために運営費交付金という国民の税金をつぎ込むことは国民の理解を得られない時代になっています。受益者負担の面からも、会費制にしたり外部資金を導入することが不可欠だと思います。現在の本学の運動施設マネジメントからはかなりの飛躍が